

先人から受け継ぐ宝の水路

世界農業遺産の地、大崎耕土に今年も夏の始まりを告げる蛍火が灯った。



大崎市鳴子温泉中山地区南原集落のホテルの里公園周辺は、全国でも珍しくゲンジボタルとヘイケボタルが同時に飛び交う。

この幻想的な情景は、江戸時代の先人が集落の用水確保のため、1647年に南原穴堰を開通させた偉業の賜物である。

南原穴堰は、南原集落が河岸段丘上にあることから近くの川から取水ができないため、上流の支流から水を確保すべく途中の山をくり抜いてできた全長1,880m（トンネル1,330m）の水路だ。



約370年たった現在も昔の姿の穴堰を通った清流が、「ゆきむすび」等の水稻約13haの農業用水や防火用水として地域を支えている。上水道ができる以前は生活用水にも使用された。



その穴堰を地域の方と見回り、点検や保全活動を行っている南原穴堰水利組合の上野孝作組合長は、「南原穴堰は江戸時代に道具等が乏しい中、トンネルや水路を先人が手彫りで作り上げた。それが今も変わらぬ姿で集落を潤し続けているのは感慨深い」と話す。